

# 駅とまちが一体となったまちづくりを推進

非鉄道事業の拡大による収益力強化に向けて、まちづくりは成長をけん引する事業と位置付けられる。東武鉄道では鉄道ネットワークを基盤とし、駅とまちが一体となったまちづくりに取り組んでいる。



執行役員  
生活サービス創造本部 副本部長  
兼 沿線価値創造統括部長  
**田邊 哲也**

「人口減少に伴い鉄道利用者が漸減していく中、東武鉄道では非鉄道事業における収益力強化が大きな課題になっています」と田邊哲也執行役員は語る。

注力しているのが「まちづくり」だ。以前は主に東武グループが所有する土地を中心に開発を行っていたが、これからは地権者・行政との連携に

よる駅前再開発や共同事業を積極的に推進していく。こうしたまちづくりのスタートとなったのが、2012年に開業した東京スカイツリータウンだ。自社の土地に加え、地元の地権者らと協力して土地区画整理事業を推進し「タワーのある街」をつくり上げた。

現在、同じ思想で進めているのが

池袋駅西口再開発である。

「池袋駅西口地区では、東武鉄道と地元地権者により設立された再開発準備組合の2つの事業主体が共同してまちづくりを進めています」（田邊執行役員）

池袋駅の利用者の多くは、駅の中での乗り換えや百貨店等の商業施設から街中に出ない傾向があり、豊島

区は、この「駅袋（えきぶくろ）」からの脱却を打ち出している。そこで、池袋駅西口再開発では、国際アート・カルチャー都市として人々を呼び込み、駅からまちへ人流を広げ、ウォークアブルなまちの実現を目指す。これは、今後の東武グループにおける駅を中心とした開発にも共通するテーマとなる。目指すのは「駅だけ」でも「まちだけ」でもない。駅とまちが有機的に結びつくまちづくりである。

## 駅とまちの境目をなくす

「これまで東武鉄道では、鉄道事業においては安全性の向上、輸送力増強、利便性向上に重点を置いてきました。今後はそれらに加え、いかにして快適な駅空間をつくるかが重要になります。『駅まち結節』とよばれる、駅とまちが一体となり、まちとの回遊性を高める空間をつくることが必要だと考えます」（田邊執行役員）

東武鉄道はこれまで作り上げてきた鉄道ネットワークを基盤に、「人と地域が共に輝きつづける」まちづくりを推進。沿線の中核拠点を開発し、新たな人流の創出を図る。

西新井駅周辺では、駅に隣接する老朽化した建物を解体し、跡地と周辺地域が一体となったまちづくりの検討を始めた。

春日部駅周辺でも、連続立体交差事業に合わせ、周辺地域の再開発計画と連携した高架下の開発を推進し、まちづくりを進めていく。広い高架下には、地元住民に喜ばれ東武グル



獨協大学前駅西側地域では、大規模戸建て住宅地を含めたまちづくりを推進している

ープとしても収益の見込める施設の誘致建設を目指す。

獨協大学前駅西側では、草加市、獨協大学、UR都市機構、トヨタホーム、東武鉄道の5者で、まちづくりを進めている。大規模な戸建て分譲事業をはじめ、住民や事業者、地域団体との連携を通して、ソフト面でも継続的なにぎわいと交流を創出し、持続可能な新しいまちをつくり出していく。こうした産官学で連携した取り組みを今後より一層推進していく。

この他、東上線沿線でも大山駅付近連続立体交差事業などで、道路整備と高架下整備により地域との連携を進める。また、朝霞台駅の駅ビル建設計画や下板橋・川越市駅周辺の開発計画も検討している。

「鉄道会社が積極的に様々な事業に取り組むことで、その鉄道沿線も活性化すると思います。東武グループが元気であることが東武沿線の価値の向上につながるの間違いありません」（田邊執行役員）

## 駅をオープンな空間に

東武鉄道には様々な駅・路線があるが、駅の規模やまちの規模にかかわらず、駅とまちを一体にしていくというコンセプトは変わらない。ヨーロッパの多くの駅には改札口がなく、パブリック空間としてまちに溶け込んでいる。同様に、駅をオープンでパブリックな場所と捉え、人が集まりやすい機能を加えたい。高齢化が進んで、人がまちに出なくなったと言われる。しかし、自動運転のタクシーやバスが普及し、それらをスマートフォンで呼び出せば、高齢者でも行きたいところに気軽に行けるようになる。駅に人々が集う場があれば、訪れる機会が増えるのではないか。こうした時代の到来を見越して、バリアフリー化をさらに進め、誰もがアクセスしやすいようにする。「駅と沿線地域をつなぐことで、人と地域が輝きつづけるまちを実現します」（田邊執行役員）



再開発後の池袋駅には、まちの玄関口となる「駅まち結節空間」を整備する予定だ